

セクシュアル・マイノリティの
ノーマライゼーション
—フィクションを通して見えるもの—

山本 絢香

目次

はじめに

1. 現代日本におけるセクシュアル・マイノリティ
 1. 1 多様な性のかたち
 1. 2 「社会的・文化的性」と「心の性」
 1. 2. 1 社会的・文化的な性
 1. 2. 2 心の性／性自認
 1. 2. 3 セクシュアル・マイノリティの生きづらさ
 1. 3 日本におけるセクシュアル・マイノリティのあり方
2. フィクションの中のセクシュアル・マイノリティ
 2. 1 「オカマ」をめぐる言説
 2. 1. 1 フィクションにおける「オカマ」の生態
 2. 1. 2 「オカマ」を通して見えるもの
 2. 2 同性愛をめぐる言説
 2. 3 総括—「ピエロ」「悲劇の主人公」、あるいは「ファンタジー」
3. セクシュアル・マイノリティのノーマライゼーションのために

おわりに

参考・引用参考文献

はじめに

私が「セクシュアル・マイノリティ」という言葉を知ったのはごく最近のことで、大学でジェンダーに関する講義を受けてからだった。セクシュアル・マイノリティという言葉、そしてその当事者の存在を知ってからというもの、私は彼らの生き方に非常に強く関心を持ち、自ら進んでセクシュアル・マイノリティに関する文献を読んだり、講義を受けたりした。大学の講義や文献、エッセイを通じて出会うセクシュアル・マイノリティ、セクシュアル・マイノリティだったことが後になってわかった友人—彼らは皆物事を深く考え、自分なりの生き方を、居場所を、探していた。私はそんなセクシュアル・マイノリティ当事者の姿に惹かれていたのだ。

私は、「平等」という言葉が好きだ。そして、マイノリティを排斥しようとする社会の中で自らの居場所を確立させようと生きるセクシュアル・マイノリティが好きだ。マイノリティだからと言ってマジョリティに劣るものはないし、小さく身を寄せ合い生きる必要も無い。社会には、マイノリティの居場所がマジョリティと同様にあるべきなのだ。それを実現するために、講じられる策は何か、私に出来ることは無いか、考えたい。それが、セクシュアル・マイノリティの生きづらさについての研究をテーマとして設定した一番の理由である。

さて、昨今日本では性同一性障害や同性愛（者）、LGBTなどといった言葉を耳にする機会が増え、社会におけるセクシュアル・マイノリティの認知も徐々に広まりつつある。しかしながら多くの人々にとって、セクシュアル・マイノリティ当事者と直接関わる機会は無（あるいは、関わっていたとしても気づかない）と言っていいだろう。そうした人々にとって、セクシュアル・マイノリティの生きる文脈を見聞きする手段として最も大きな存在は、テレビなどのマスメディアや小説、漫画などのフィクション作品、すなわち「メディア」の存在だろう。義務教育の一環の授業や専門書の類と比べ、気軽に触れられ、多くの人にとって身近な存在であるメディアがセクシュアル・マイノリティを取り上げるようになったことが、現代日本においてセクシュアル・マイノリティの存在が広く知られるようになった一番の要因として考えられる。しかしながら、フィクションを通じて社会に流布する「フィクションという文脈の中に生きるセクシュアル・マイノリティ」の姿は、現実の当事者のそれと果たしてどれほど近いものか。あまりにも偏った、ステレオタイプなセクシュアル・マイノリティ像ばかりが目立つ描き方も、勿論存在している。そういったフィクション内での描き方によって拡散されるセクシュアル・マイノリティの「特殊」なイメージが、現実の当事者にとっての生きづらさとなっている可能性は非常に高い。であれば、セクシュアル・マイノリティの生きづらさ解消のために必要なのは、セクシュアル・マイノリティを特殊性から解放する—すなわちセクシュアル・マイノリティのノーマライゼーションであろう。

それらを踏まえて本稿では、まず1章においてセクシュアル・マイノリティの分類と生きづらさの現状、その根幹に関わる要因について明らかにし、続く2章では日本におけるセクシュアル・マイノリティのあり方について、フィクションを切り口として実際にいくつか作品例を挙げながら分析する。その上で最後の3章では、メディア、特にフィクショ

ン作品を利用したセクシュアル・マイノリティのノーマライゼーションの可能性について、検討していくものとする。なお本稿においては参考として、アンケートによるセクシュアル・マイノリティへの意識調査の結果や、当事者へのインタビュー記録なども引用しながら論を展開していく。

1. 現代日本におけるセクシュアル・マイノリティ

1. 1 多様な性のかたち

セクシュアル・マイノリティ、直訳すると性的少数者とは、一体どのような人々のことを指すのか。その問いに対する答えは、「セクシュアル・マジョリティ、つまり性的多数者ではない人々」というのが最も単純明快で、わかりやすく、さらに言えば、このようにしか答えようが無いとも言えるだろう。例えばこの問いに、「セクシュアル・マイノリティとは、同性愛者や、性同一性障害の人のことだ」と具体例を挙げて答えることも可能である。しかしながら「同性愛者や性同一性障害の人」というのは、セクシュアル・マイノリティを構成するほんの一部分の要素にすぎず、「セクシュアル・マイノリティがどのような人々であるのか」という問いの正しい答えとは言えない。

「セクシュアル・マイノリティとは、セクシュアル・マジョリティではない人々」であるとするため、ならばセクシュアル・マジョリティとはどのような人々であるかということ、ここで定義しておかなければならない。端的に表せば、セクシュアル・マジョリティとは、人間の性を構成する3つの要素—すなわち「身体の性」「心の性（性自認）」「性的指向」において、「身体の性・心の性が一致していて、かつ性的指向の対象が異性である人」のことである。身体の性とは、染色体やそれに基づいて形成される外性器など、生物学低名要因によって決定される性。心の性とは、性自認とも呼ばれ、自らの性別に関する自己認識。性的指向とは、端的に言えば自らの性愛の対象のことを指している。そして、性を構成するこれら3つの要素全てにおいて多数派に当てはまる人、これがセクシュアル・マジョリティにあたり、俗に言う「普通の人」ということになる。彼らの持つ性のかたちこそ、社会における一般的な人間の性のあり方、すなわち「性の規範」とされているものである。そして、この「規範」から外れた要素、つまり少数派に分類される要素をひとつでも内在させている時、その人はセクシュアル・マイノリティとなる。しかし、この「規範」となる要素は、それぞれの要素において1通りしかなく、したがって「規範」の定義する範囲は非常に狭いと言えよう。

このようにごく狭い定義の「規範」に対して、「規範」から零れた全ての人々「セクシュアル・マイノリティ」となるため、その分類は多岐に渡り、一口に少数派と言っても、多様な彼らの性のあり方を、「規範」たる多数派の性のあり方と二項対立的に語ることは出来ない。上記で触れたが、アレキサンダーほか（2012）による記述に基づくならば、人間の性を構成する要素は「身体の性（sex）」、「心の性／性自認（gender identity）」、「性的指向（sexuality）」の3つのカテゴリーに分けることが出来、そのカテゴリーの中にそれぞれ

れマジョリティ、マイノリティに派生するため、実に多様な性のかたちが存在しているのである。三つの要素について宮（2010）による記述を参考にそれぞれ簡単にその特徴を述べると、「身体の性」とは生物学的な性、つまり性器や遺伝子によって決定される性であり、最も根源的に人間の性を「女性／男性」に分けているものである。これにおける多数者は「男」「女」それぞれの性別、称す者は「インターセックス」と呼ばれる人々である。それとは対照的に「心の性／性自認」は、生物学的な要因によらず、「自分は女性／男性である」という自己認識のことを指す。性自認における多数者は「女」「男」に安住出来る人—すなわち身体の性と性自認が一致している人、少数者はそこに安住できない人—すなわち広義のトランスジェンダーとされている。そして「性的指向」とは、非常に多義的なものであるが、世界保健機関（WHO）の定義では、性的指向、すなわちセクシュアリティとは、「生涯を通じて人間の存在において中心的な事柄であり、セックス（性別／性交）、ジェンダー・アイデンティティ、性別役割、性的指向、エロティシズム、快楽、親密さ、生殖を包含するものである」とされている（中村 2008）。ここでは一義的ではあるものの「性的欲望や恋愛感情の対象が同性／異性のどちらに向かうかを示すもの」とし、本論では以降もこの意味で使っていくものとする。ここにおける多数者は異性愛者、少数者は同性／両性愛者となる。

さて、セクシュアル・マイノリティに関する議論においてしばしば主題となるのが、セクシュアル・マイノリティ当事者の日常感じている生きづらさと、その解消法である。本論においてもセクシュアル・マイノリティ当事者の生きづらさと軽減についての検討を行うが、それは後述のものとして、そもそもなぜセクシュアル・マイノリティは生きづらさを感じてしまうのだろうか、ということについて考えてみたい。私はその最も根源たる要因を、「セクシュアル・マジョリティ」のあり方こそ「正しい」人間の性のあり方であるとする考え方、すなわち「セクシュアル・マジョリティ至上主義」のためであると考えている。しばしば当事者の生きづらさの最たる要因として挙げられる社会からの不認知や不理解、偏見、それによる排斥は、こうした「セクシュアル・マジョリティ至上主義」に基づいて生まれるものだろう。今もなお社会に深く根付いている「男（女）は男（女）らしく、男（女）がすべきと社会で信じられているように振る舞え」という考え方は、人間を構成する多様な性のカテゴリーの中でも、社会的・文化的な性である「ジェンダー」と深く関わっている。よって以降では、セクシュアル・マイノリティの生きづらさについて社会的／文化的な性と、心の性との関係を中心として見ていきたい。

1. 2 「社会的・文化的な性」と「心の性」

1. 2. 1 社会的・文化的な性

染色体や性器といった生物学的な要因によって分けられた性である「身体の性（セックス）」に対して、生物学的な区別によらない性の分類を、社会的あるいは文化的に構築された性、すなわち「ジェンダー」と言う。宮崎（2012）によればジェンダーとは、①「人格パーソナリティ」、②髪型や服装等を含む「身なりやしぐさなどの外見や言葉遣い」、そして③「社会的・文化的に求められる性役割」の3つの要素から構成されており、これら3つの要素すべてにおいて、男／女の差異が現れているという。ここでは宮崎の挙げる例を

引用しつつ、それぞれの要素における男女の差異がどういったものを示すかを簡易に紹介していくことにする。

①人格パーソナリティ

「男らしい／女らしい」性格のことを指す。

女性では「従順、柔和、おしとやか、物静か、優美、繊細」、それとは対照的に男性では「剛直、率直、さわやか、意志が強い」などの性格がそれぞれ望ましいとされる。また、女性は感情的で情緒的、反対に男性は理屈や論理で物事を考えるものと見なされる。総合し、あらゆる場面において男性は能動的・積極的に振る舞い主導的な役割を果たす、女性は受動的・順応的に振る舞い男性の決定に追従するものとされてきた。また宮崎はこれに関して言及していないが、私自身がこれまで聞きし経験してきたことに基づけば、「女性は可愛いものが好きである」といった言説は、幼い子供から成人まで、あらゆる年代の人に対して適用される。

人が生まれてから経験するジェンダーにおける性差の中で、最も根幹的な部分を構築しているのがこの人格パーソナリティにおける性差だろう。

②身なりやしぐさなどの外見や言葉遣い

外面的に現れる「男らしさ／女らしさ」を指す。

身なりにおいては、女性ではスカートやヒールの高い靴、また化粧、マニキュアなどが特に象徴的である。長く伸ばした髪も女性に多く見られるだろう。男性では、Yシャツにネクタイ、背広に革靴などが挙げられる。髪型は、大抵短く保たれている場合が多いとされる。

しぐさや言葉遣いに関して、これらにおける性差は前述の「人格パーソナリティ」における性差の影響を強く受けているものと思われる。例えば、女性はおしとやかな振る舞いと丁寧な言葉遣い、男性は豪快な振る舞いとハキハキした話し方が好ましいとされる、といった具合だ。

③社会的・文化的に求められる性役割

性別役割分業とも呼ばれ、伝統的に、職業決定、家庭などの社会全体において性別に基づいた分業がなされてきた。

伝統的な家庭においては、男性は一家の主として働きに出、女性はそれを支え主不在の家庭を守るものとして家事労働に従事する、という役割がそれぞれ与えられていた。また職業においても、戦時中、銃をとり戦うのは男性、怪我人や病人の看護は女性、といった具合に、かつては明確な性差による区別があった。戦争が終わり、女性が家庭外に働きに出ることの出来る社会になってからも、やはり女性は家事労働の担い手として見られることが多く、仮に働きに出たとしてもその業務内容はコピーやお茶汲み、受付、電話対応などの補助的なものになりがちで、重要な役職には常に男性が宛がわれてきた。

しかし昨今では、家庭、職業それぞれにおいて、性差による分業に変化が見られるようになってきた。

家庭においては、これまで家を守り、家事労働に従事してきた女性達が、家庭に入

ることなく自らが稼ぎ手として働きに出、社会参加することは全く珍しくない。反対に「専業主夫」などと言われ、今まで女性がこなしてきた家事労働に従事する役割を担う男性もいる。これまで家庭の中だけで与えられた役割を果たしてきた女性が、近年では徐々に社会進出を果たしており、これによって家庭における性差による分業は、これまでに比べてかなり線引きが曖昧になっていると言える。また同じく家庭における役割分業として、母の役割とされてきた育児についても、現在では育児休暇を取得するなどして育児に積極的に参加する男性を「イクメン」などと呼び、男性の育児参加が取り沙汰されるようにもなった。しかしながらそうして社会的に大きく話題になること自体、依然として男性の育児参加は珍しい、もしくは貴重であり、非常のものであると認識されているということを、逆説的に示すことにもなってしまうと言えることに注目しておきたい。

職業に基づく男女の区別についても、近年の女性の社会進出により、家庭でのそれと同様に現在ではかなり曖昧なものになりつつある。例えば電車やタクシー、トラックの運転手、運送業者など、以前は男性のものとされていた職種に女性が就くことも珍しくはなくなったし、逆に、その名が示すとおり女性の職種とされてきた「看護婦」が「看護師」と職名を変え、看護の分野への男性の進出も見られるようになった。

社会的役割に関する性差による区別（女性においては差別とも言える待遇）は、時代と共に変化し、徐々にではあるが薄らぎつつあると言えるだろう。その裏には、女性やフェミニストたちの懸命な社会へのはたらきかけがあった。とはいえ、社会全体において潜在的に「男は外で仕事、女は家で家事」というステレオタイプな性差への意識が残存しているであろうことが伺える。

さて、上記ではジェンダーを構成する主要な 3 つの要素についてそれぞれ確認してきたが、これらを踏まえ、私たちが日常的に他人に対して下している性の判別について、今一度振り返っておきたい。自己の意思には関わりなく絶対的に決定される性、すなわち人間の身体的な性を決定する要素のうち、他人から見える形で発現している要素は外性器、すなわちペニスもしくはヴァギナということになるのだが、通常の場合これらは他人からは見えていないし、まだ性別による身体的特徴の発現していない新生児、乳幼児相手でも無い限り、外性器を見るまでも無く他人の性別を判断してしまっている。それでは、この性の判別は何を基準に行われているのか。まず目に入るのは、服装や顔つき、次いで立ち振る舞い、言葉遣いなども見えてくることもあるかもしれない。それらを加味した上で、「こうした要素を持ち合わせているのは男性／女性である」という、ステレオタイプな性への概念を持ち出し、他人の性を判断してしまう。その判断というのも、「この人の振る舞いは女性らしいので女性だ」「この人は男性らしいの服を着ているので男性だ」という決定の仕方では勿論ない。性別の判断の基準とされているのは、ジェンダーたる振る舞いや言葉遣い、服装以外の外的特徴—すなわち骨格や顔つき、声など、人が元来持ち合わせている身体的特徴、すなわち身体性の性であり、それに見合っていない性差に分類された振る舞いや身なりをしている人のことは、「あの人は男性の顔なのに動きが女性的でどこかおかしい」「あの人は女性的な体なのにひどく乱暴な言葉遣いだ」などと揶揄される。

ジェンダーとはすなわち、「男らしさ／女らしさ」という言葉で置き換えることができる。

しかしながら社会的／文化的に構築された性であるジェンダーは、実際には遺伝子上の性差との結びつきは全く無い。したがって、本来であればセックスが男だからといって「男らしく」振舞うべき、ということは決してないはずなのだ。しかしながら、身体に「男性的な」特徴が現れている人が、社会的に「女性的」だと思われている振る舞いをすると、「それはおかしいことだ」と後ろ指を差されたり、非難されたりする。こうして見ると、人間の性差は身体的な性によって判断が下されている部分が多いように感じられる。

そうになると、ジェンダーは足枷だ、と思う。中村（2008）の文言を借りるなら、生物学的要因に基づく性差を、「人間は男か女のどちらかに生まれるはず」、という思い込みのもと、いくつかの生物学的な要因を根拠にしながら他人を男女のどちらかに振り分けた結果であるとすれば、ジェンダーもまた、人間を男女のどちらかに二分するために共有している文化的プロセス、男女の振り分けを行う社会的装置でしかない。こうした、社会のセックスとジェンダーの強い結びつき意識が、セクシュアル・マイノリティ当事者の生きづらさの要因としてまずひとつ挙げられる。

1. 2. 2 心の性／性自認

上記では、社会的／文化的に構築される性・ジェンダーについて記してきた。これらは概ね、既存の研究や情報に基づく他人の判断、または文化に根付くステレオタイプによって決定される性である。ここから見ていくのは、そうしたセックスやジェンダーといった性の存在や自らの意思・意識、そして周囲から受ける影響など、様々な要因と結びつきながら決定されていく「心の性」だ。これが、性自認（ジェンダー・アイデンティティ）と呼ばれているものである。

簡単に表すと、自分は女である、男であるという自己認識のことを、性自認という。宮崎（2012）によると、「小さい頃から、自分の性の区分を毎日毎日認識させられることで、『自分は男だ（女だ）』という意識が植え付けられていく」のであり、この意識が性自認であるという。

心の性（性自認）におけるマイノリティに関する話をする上では、身体の性との関係を切り離して考えることは出来ない、ということをお初めにしておくべきだろう。というのも、心の性のカテゴリーにおけるマイノリティというのは、身体の性と性自認が食い違ってしまっている人のことを指すためである。それを踏まえ、性自認における多数者とは、身体の性と性自認が一致している人、すなわち『女』／『男』に安住できる人。少数者とは、「体の性と心の性が一致せず、性別違和感を持っている人」を指している（宮 2010）。

性自認におけるマイノリティ、すなわち身体の性と性自認との間にズレを持つ人々のことを、総じて広義の「トランスジェンダー」と呼ぶ。「トランスジェンダー」の代名詞とも言えるほど広く知られているものに「性同一性障害(Gender Identity Disorder 以下GID)」という言葉があるが、GIDは医学的な疾患名であり、トランスジェンダー当事者全員が必ずしもGIDであるというわけではないため、「トランスジェンダー=GID」とすることは出来ない（これに関しては後述のこと）。宮崎（2012）によれば、トランスジェンダー当事者には、大きく分けて以下の3つのタイプが存在しているという。

1) トランスセクシュアル (TS)

性別適合手術（いわゆる性転換手術）などを行い、肉体的な特徴を変えることで、身体性と性自認とのズレによる苦痛を緩和しようとする人々。一般に GID と呼ばれるのはこの TS にあたる人のことを指している場合が多い。

2) 狭義のトランスジェンダー (TG)

肉体を変えることまではしないが、社会的に男性／女性の性役割と考えられていること（化粧をする、服装や髪型、立ち振る舞いを変えるなど）を行うことで苦痛の緩和を図ろうとする人々。

3) トランスヴェタイト (TV)

異性装に特にこだわりを持つ人々。

これらは MTF (Male to Female 男性の身体を持っているが性自認は女性)、FTM (Female to Male 女性の身体を持っているが性自認は男性)のどちらの人においてもいずれかに当てはまるものとされている（もしくは複数の要素を持ち合わせている）。同じ「身体性と性自認にズレがある」人々のなかでも、TS、TG、TV のように違いが生まれるのは、各人が「何をして男／女のアイデンティティとしているか」が異なるためである、と考えられる。

MtF 当事者を仮に A さんとして、例にとって考えてみよう。もしも A さんが 1) トランスセクシュアルであった場合、A さんは「女のアイデンティティは肉体的特徴にある」と考えているので、性別適合手術をもってペニスを取り除いたり、胸にふくらみを持たせたりしようとするだろう。また 2) 狭義のトランスジェンダーであった場合には、A さんは肉体的特徴以上に、社会的性役割を果たすことが「女性」である上で重要だと考えるので、肉体はそのままに化粧をしたり、「女性的」とされるような言葉遣いや立ち振る舞いをしたりするように、心がけるだろう。また 3) トランスヴェタイトであったなら、肉体も性役割も A さんが生来持っているものでよいが、「女性のもの」とされている服装—例えばスカートやヒール靴など—を身につけることに、「女性性」を見出し、それらを身に纏って生活しようとするだろう。

このように、何をして「男性／女性のアイデンティティ」と認識しているかによって、違和感の緩和方法は異なるため、ひと括りに「トランスジェンダー当事者」と言ってその特性や、生きづらさの解消法について語ることは本来出来ないはずである。ところが日本においては、特に GID の知名度の高さから TS が最も有名であり、かつ「トランスジェンダー=TS (GID)=性転換手術をする人々」という偏った認識をしている人が多いように感じる。ゆえに、同じトランスジェンダーでも TV の特性を持つ人のことはトランスジェンダー当事者と認識できず、「女装（男装）をしている、あの人は変態だ」「オカマだ」などと揶揄する。これは全てのカテゴリーに関して言えることだが、性が多様性を持つものだからこそ、一義的な側面の情報ばかりが拡散されることは、かえって当事者の生きづらさを助長しかねないということを忘れてはならない。

1. 2. 3 セクシュアル・マイノリティの生きづらさ

「身体性」における少数者、インターセックスの当事者である橋本（2000）は、著書の中で人間の多様な性に関して、以下のように述べている。「世の中には女性だと思い込んでいる人間と、男性だと思い込んでいる人間が存在しているだけなのです。そして自分周りの人間に、女性／男性だと認識され、思い込まされているだけなのです。『人類の性は女

性と男性しか存在しない』という思想は、『女性社会』と『男性社会』が作り上げた思い込みと思い込まれにすぎないのです。人類の性には、女性のように分化した人間と、男性のように分化した人間のあいだの、多様に分化した中間性、『性のグラデーション』が存在しているのです一人ひとりのせいは違ってあたりまえ、性は『個性』なのです。多様な「性」はもはやひとつひとつを正確にカテゴライズすることは出来ず、十人十色のそれはまさに人間の「個性」であると言えよう。

例えばある人が、FtM(女性の身体だが性自認は男性)当事者のTV(トランスヴェタイト・異性装者)であったとしよう。彼女は自分の身体の性別に違和感を抱いており、彼女にとっての「男性のアイデンティティ」は「男性装」にある。ゆえに、その違和感を緩和するために彼女は男性らしいとされる服を着たり、それらしい髪型をしたりする。FtMは彼女の「個性」であり、彼女が男性装をするのは、その「個性」を殺してしまわないためだ。彼女の持つ「個性」自体は、生きづらさには繋がらない。違和感の緩和の方法を探して、それを実践すればよいのだ。では何が彼女の生きづらさを作っているかといえ、彼女が男性らしい装いをするのを、「女なのに」と揶揄する社会の目一つまり、「セクシュアル、マジョリティ至上主義」なのだ。

「男(女)の身体をしているのだから、男(女)らしく振る舞い、異性である女性(男性)を性愛の対象とするべきだ」という主張は、実に尤もらしく聞こえる言説だが、これほどまでに多様な性のあり方が明確に提示されている今、「セクシュアル・マジョリティだけが正しい」という考え方が正しいものとは言えないことは明確だ。しかし現状として、「セクシュアル・マイノリティ」の名前や存在への認知が広がり、同時に当事者自身も声を上げることの出来る環境が生まれながらも、セクシュアル・マイノリティの生きづらさに関する議論が絶えないことが、未だ社会に「セクシュアル・マジョリティ至上主義」が根付いて解消されていないことの証明だろう。これが、セクシュアル・マイノリティ当事者にとっての生きづらさを生み出す最たる要因だと私は考えている。

1. 3 日本におけるセクシュアル・マイノリティのあり方

電通ダイバーシティ・ラボは、2015年4月にインターネットを通じて国内69,989名を対象に、性的少数者に関する調査、「LGBT調査2015」を行った。それによれば、日本において、「LGBT層(※ここではこの言葉がセクシュアル・マイノリティ全体を指している)に該当する人は7.6%」であるようだ。なお、この調査の2012年における結果では、「LGBT層」の比率は5.2%であった。これを踏まえ、単純に数字だけを見れば「セクシュアル・マイノリティの比率は3年間で増加している」ということになるが、この調査に関してそもそも調査対象となっている人数が非常に少ないことや、調査方法がインターネットであり範囲が狭いこと、さらに回答した人が自分の性に関して必ずしも真実を答えたとは限らないこと、また現在では社会の状況が変わり、自らがセクシュアル・マイノリティであることをカミングアウトしやすくなったことなど、様々な要素を鑑みると、この調査の結果として出ている数字を「日本に存在するセクシュアル・マイノリティ当事者の数」としてみると、どれほど正確なものかということについては議論の余地が残る。私はむしろこの結果を、「日本で認知されているセクシュアル・マイノリティ当事者の数」として見るのが妥当な

のではないかと感じている。

さて、日本におけるセクシュアル・マイノリティの認知の広がり、そのあり方について考える時、私が特に注目したいのはメディアの存在であり、その中でもとりわけ「セクシュアル・マイノリティ」のキャラクターが登場するフィクション作品群—小説や漫画、ドラマなどの存在である。すなわち同性／両性愛者やトランスジェンダーと認識できるキャラクターが登場するフィクション作品は、今や市場に溢れており、それらの流通によって、これまで現実においてセクシュアル・マイノリティ当事者と直接関わる機会の無かった—もしくは関わったことがない—と思っていた一人々も、物語作品を通じて「手軽に」セクシュアル・マイノリティや、彼らの営む生活に触れることが出来るようになった。あるいはフィクション作品以外にも、主にテレビ番組におけるセクシュアル・マイノリティに関するドキュメンタリーや、「オカマ」と呼ばれるようなタレントの存在が、これまで以上に「セクシュアル・マイノリティ」の存在を身近に感じさせてくれている。よって、セクシュアル・マイノリティへの意識形成にはフィクションの存在が大きく関わっているのではないかと、という推論である。

そこで次章では、日本におけるセクシュアル・マイノリティのあり方を、メディア、特にフィクション作品を切り口にして、実際にセクシュアル・マイノリティの登場人物のいる作品をいくつか挙げながらその描かれ方について分析していく。その上で、続く3章ではこれと関連付けてセクシュアル・マイノリティのノーマライゼーションのためにどのようなことが出来るかを検討していくものとした。

2. フィクションの中のセクシュアル・マイノリティ

2. 1 「オカマ」をめぐる言説

フィクション作品に登場するセクシュアル・マイノリティの中で、最も代表的なものひとつとして「オカマ」と呼ばれるキャラクターを挙げる事が出来るだろう。生物的には「男性」の特徴を持っているのに、服装、髪型、化粧などの装いや、言葉遣い、立ち振る舞いなどは「女性」のそれであり、同性を好きな「男性」—すなわち「オカマ」もしくは「オネエ」と呼ばれる人物は、昨今フィクション作品のみならず、テレビ番組のバラエティなどへも多々出演しており、その姿を見ない日は無い、と言っても過言ではないくらいだ。ここではそうした「オカマ」について、「オカマ」のキャラクターが登場する作品を2点取り上げ、主に主人公との関係性における「オカマ」キャラクターの有りようをそれぞれ見ていきたい。なお本論においては、「オカマ」のジェンダーを指す三人称として終始「彼女」を使っていくことを、あらかじめここに明記しておく。

2. 1. 1 フィクションにおける「オカマ」の生態

まずは、坂木司の『ワーキングホリデー』を取り上げたい。この作品のあらすじは以下の通りである。

主人公・不良上がりのホストである沖田大和（おきた・やまと、以下「ヤマト」）の勤めるホストクラブに、ある日突然、ヤマトを「父」と呼ぶ小学生・神保進（じんぼすすむ・以下「進」）が現れる。聞けば進は、ヤマトと彼の元恋人の間の子供であるという。ヤマトは混乱するが、紆余曲折を経てヤマトと進は共に生活するようになり、やがてヤマトはホストを辞め、宅配便ドライバーとしての道を新たに歩み始めることになる。

この作品には、「ジャスミン」という「オカマ」のキャラクターが登場する。ジャスミンは、主人公ヤマトが勤めていたホストクラブ「クラブ・ジャスミン」のオーナー、つまりヤマトの元上司にあたる人物である。かつて上京してきた彼をホストの道へと誘い、彼にホストとしての教養を叩き込んだ張本人であると共に、その道からヤマトを追放し新たに宅配ドライバーという道を彼に示したのもまた、ジャスミンであった。ヤマトもそのことには多大な恩義を感じており、脇役的な扱いではあるものの、ジャスミンは常にヤマトを導き翻弄する存在として描かれている重要人物である。

『ワーキングホリデー』におけるジャスミン—すなわち「オカマ」の描かれ方は「ステレオタイプなオカマ」そのものであると言える。まず外面的な部分に関して、これは世間一般に認識されている「オカマ」、つまり「男性らしい顔つき・背格好に、女装、女言葉」という世間一般で認識されている「オカマ」の姿がそのまま反映されている。なかでも「濃い（派手な）つけ睫毛」という描写は何度か使われており、彼女の外見においてはかなり重要な部分であるようだ。また彼女の人物に関してだが、言動やヤマトの主観描写から、非常に聡明で快活、情に厚く、いわゆる「サバサバした」性格の人物である、というような印象を受ける。以上まとめると、ヤマトのジャスミンに対する印象は「ステレオタイプなオカマ」であり「自分より一枚上手の存在」だということが伺える。

「オカマ」の登場する作品例の2つ目として、よしもとばななの『キッチン』を取り上げる。

唯一の肉親であった祖母を亡くした主人公・桜井みかげ（さくらい・みかげ、以下「みかげ」）は、祖母の知り合いでひとつ歳下の青年・田辺雄一（たなべ・ゆういち、以下「雄一」）の申し出により、雄一とその母・えり子のいる田辺家で暮らし始めるところから、この物語は始まる。本作に登場する「オカマ」キャラクターは、雄一の母「えり子」だ。そして『キッチン』における物語のターニングポイントともなる、最も大きな事件に関わるのが、彼女なのである。えり子は物語の中盤において、殺されてしまうのだ。この大事件についてはひとまず置いておくとして、まずはえり子というキャラクターの人物像について検討していきたい。なお、『キッチン』も『ワーキングホリデー』と同様主人公・みかげの一人称小説であるため、会話文以外のえり子に関する描写はすべてみかげの主観となる。

前述した通り、本作の「オカマ」キャラクターであるえり子は、作中における「現在」の時間軸では雄一の「母」である。彼女はかつて男性として生きていたが、雄一がまだ幼い頃に雄一の本物の母、つまりえり子の妻にあたる女性が亡くなった時、「誰も好きになりそうにないから」（P23）という理由で女性になることを決めたのだと雄一は語る。現在では、雄一の「母親」と務めながら、ゲイバーで働いていた。

『キッチン』におけるえり子—すなわち「オカマ」キャラクターの描かれ方において特筆すべきは、なんといっても彼女に与えられた数々の特殊な設定だろう。まず、彼女の美しさへの言及の多さは特に目に付く。外面的なもののみならず、人間性の部分に関して、

みかげはとにかくえり子を「美しい」と評している。これは、前述の『ワーキングホリデー』におけるジャスミンの描写とは対照的である。さらに彼女の歩んだ人生は、妻との駆け落ち、そしてその妻を亡くしたあとには整形手術により外見から内面まで「女性」へと変貌を遂げ（ただし「性転換手術を行った」という記述は無いので、顔面のみ女性らしいそれに変えたものと思われる）、雄一を育てながらゲイバーで働いていた、という非常に波乱万丈なものであった。そしてそんな彼女の、ストーカーに刺されて亡くなった、という凄惨な最期。えり子の人生、そして存在自体が非常にドラマティックなものとして描かれているように感じられ、その存在は雄一にも、出会って間もなかったみかげにも、死してなお大きな影響を与えていた。事実、一度雄一の家を離れていたみかげが再び彼と暮らし出すのも、えり子の死がきっかけだったのである。

以上で 2 つの作品を通してフィクションにおける「オカマ」キャラクターの人物像、その作中における役割について見てきた。ここから、実際に作中描かれていた姿を踏まえ、改めてフィクション作品における「オカマ」というキャラクターの人物像について、「性」の観点、そして「人間性」の観点からそれぞれ明らかにしておこう。

「オカマ」を構成する「性」の要素については、作品中の「オカマ」の言動や容姿に関する描写から推察することが出来るので、詳しく見ていこう。「身体は男性的だが、女言葉で喋り、女装をして派手な化粧を施し、いわば“女性らしく”振舞っている人物」、総括すると「オカマ」のキャラクターの特徴としてこういった点が挙げられるだろう。これらの要素についてひとつひとつ見ていくと、まず「女言葉で喋り、女装をして派手な化粧を施している」というのは、性自認におけるマイノリティのうち「広義のトランスジェンダー」と呼ばれる層に見られる性質だ。その中でも、「女言葉で喋る」と「化粧を施す」のは狭義のトランスジェンダー、「女装をする」のはトランスヴェタイトの特性である。また、ここで扱った 2 作品中では特に言及されていないことだったが、しばしば語られる言説として、「オカマはゲイ」だとされがちである、ということもここで示しておきたい。このように、「オカマ」の性には様々なセクシュアル・マイノリティの要素が包含されており、フィクションにおいて当たり前のように常に「オカマ」に付与されているステータスは、実際に細かく見ていくと非常に複雑であり、様々な「セクシュアル・マイノリティ」の要素が縋り混ざっていることがわかる。

「性」という観点から語るなら、「オカマ」の属する世界についても触れなければならない。ここで扱った 2 作品における「オカマ」のキャラクターは、共にホストクラブ、ゲイバーという、所謂「夜の商売」、性風俗の世界に属していた。また、テレビ番組などのマスメディアに出演する「オカマ」タレントについても、彼女らはしばしば他の男性タレントなどに詰め寄ったり、性的な話題を語ったりと、メディアにおいて「オカマ」が「性的な存在」として扱われていることがわかる。

これは以前、大学の講義において「もし自分の周りに同性愛者がいたらどう感じるか」という議題で討論をした時の自身の経験談なのだが、ある男子学生は、「もしかしたら自分が狙われ、性的な目で見られるかもしれない、それが怖い」と述べた。同性愛者だからと言って、もちろんすべての同性が恋愛対象になるはずなどないのだが、彼にとっては同性愛者は、「同性なら誰彼構わず性愛の対象とする」存在であつたらしい。これを聞いて私は、彼の中にはひょっとすると、メディアによって見せられる「男性」が相手を選ばず男性に

迫る姿—すなわち「オカマ」の性的な印象が根付いていたのかもしれない、と感じた。彼の中でこうした偏見が生まれたことには、「オカマ」の複雑な性と、「性的な存在」としての扱い、その両方の影響を受けたことによると思われる。

では、性格などの「人間性」という観点から見た「オカマ」はどうだろうか。『ワーキングホリデー』における「オカマ」キャラクターの「ジャスミン」も、『キッチン』における「オカマ」キャラクターの「えり子」も、非常に達観したような性格をしており、常に主人公を導き翻弄し、その死後も主人公の進むべき道を示してくれるような存在として描かれていた。いわば「人格者」だ。「オカマ」に対するマジョリティのイメージについては後に詳しく記述しているが、「オカマ」に関する意識調査において、「人生経験が豊富そう」「相談に乗ってくれそう」「懐が広い」などの意見が多数出ていたことから、現実でも「オカマ＝人格者」という印象が形成されていることが確認できる。

以上をまとめると、フィクションにおける「オカマ」は、「複雑な性を持ち、性的な存在であり、人格者」として描かれていた、と言うことが出来るだろう。

2. 1. 2 「オカマ」を通して見えるもの

ここまでフィクションという文脈に生きる「オカマ」の生態について見てきたのだが、では実際に、フィクションなどのメディアを通して「オカマ」に出会った人々が、「オカマ」に対してどのような印象を抱いているかということにも触れておきたい。

過日、インターネットにおいて無作為に選出した 100 名を対象に、「“オカマ”や“オネエ”と呼ばれる人々、またその言葉にどのような印象を受けるか」という、回答は自由記入形式のアンケート調査を行った。その結果を見ると、プラスイメージと捉えられる意見としては、「(美的・笑いなどの)センスがある」「強そう」「人生経験が豊富」「懐が大きい」「相談に乗ってくれる」「明るい」「自分の意見をはっきりと言う」などがあり、逆にマイナスイメージの意見としては、「気持ち悪い」「関わりたくない・受け入れ難い」「恋愛の対象になるのは嫌だ」などが寄せられていた。これらを見ると、「オカマ」に関する印象の中で「性」に関するものは非常に少なく、ほとんどが「オカマ」の人間性や人格について触れられていた。また、マイナスイメージの意見に関しては相対的に見ると非常に少なく、「オカマ」という人物は、比較的好印象で認識されていることがわかった。また、中立的な意見、「オカマ」「オネエ」という言葉自体や彼らの社会的な扱いについての意見として、「オネエと呼ばれているタレント達が LGBT の人達のイメージを固定してしまわないかという不安がある」「(生き方は)個人の自由」「人物自体は好印象だが言葉としては差別的」「テレビの中のステレオタイプな“オカマ”と身近に(実際に)いる人とのイメージの差が大きい」「テレビなどで“イロモノ”的な扱いをされている、美容に詳しい、女性の悩み相談のご指南役、歌舞伎町などのバーがある、など。しかしそれらはあくまで世間的なイメージであって、それは社会が作ったものだと思うし、誤ったイメージだとは思いう。」など、メディアによって流布される「オカマ」のイメージに関する問題点の核心的な部分についての指摘もあった。

以上の結果からもわかるように、「オカマ」は社会において、フィクション内での描かれ方と概ね同じような好印象を抱かれており、また彼らの抱える問題に関して理解を示す姿勢を見せる人々も存在している。しかしながら、フィクション内での「オカマ」キャラク

ターの人格同様、アンケート調査においても「オカマ」が「人格者」であるかのような認識をしている人々が多数存在していることの是非については、議論の余地があるだろう。また、前節でも触れ、アンケート調査でもそうした意見（「イロモノ」、「水商売」）がいくつか出ていたのだが、「オカマ」はフィクションにおいて、バーやクラブなどといった、所謂「夜の商売」に関わるものとして描かれている事例が多数存在し、彼らが「性的な存在」として見られているということについても注目したい。

「人格者」であり「性の世界」に生きるセクシュアル・マイノリティとして描かれる「オカマ」の姿は「日常」とは縁遠く、マジョリティにとっての「オカマ」、ひいては「セクシュアル・マイノリティ」という存在をドラマティックな世界に隔離している、と言える。

2. 2 同性愛に関する言説

前節で取り上げた「オカマ」と並んで、フィクションにおいて登場するセクシュアル・マイノリティの中でも知名度の高いものに、同性愛者の存在を挙げることが出来るだろう。同性愛者の登場する物語は、彼らの特性（性的指向に関する特殊性）ゆえか、恋愛を主題とした作品であることがほとんどである。そしてそのような、同性愛を題材にしている、あるいは同性愛者である登場人物をメインストリームに組み込んで展開していく物語は、大きく以下の2種類に分類することが出来る。まず、ヘテロ・セクシズムが前提とされる世界において、同性愛者を「(括弧づきの) 障害者」と位置づけて展開される恋愛物語、もうひとつはヘテロ・セクシズム主義の崩壊した世界において展開される同性愛物語、すなわち、いわゆる「BL (ボーイズラブ)」などと呼ばれるものである。なお本稿においては前者についてのみ分析し、後者についての分析・考察は今後機会を見て密に行っていく所存である。

では、実際に作品例を挙げていく。私がここで同性愛を扱ったフィクションとして取り上げたいのは、江國香織の小説『きらきらひかる』である。物語は、主人公・岸田笑子（きしだ・しょうこ、以下「笑子」）とその夫・岸田睦月（きしだ・むつき、以下「睦月」）が結婚して10日後のある夜から始まる。妻の笑子はアルコール中毒、夫の睦月は「ホモ」つまり男性同性愛者。そんな社会的マイノリティの2人と、彼らを取り巻く人々の、穏やかかつ奇妙な日常を、2人の視点から交互に描き出した作品だ。先に述べておくところの作品には、3人のセクシュアル・マイノリティのキャラクターが存在する。まず主人公の夫である睦月、そして睦月の恋人である紺（こん）、最後に、睦月の友人であり医者仲間の柿井。彼らはいずれも男性同性愛者、すなわちゲイである。うち、睦月と紺は恋人同士である。

『きらきらひかる』におけるセクシュアル・マイノリティの描かれ方の中で注目したい点が2つある。1つ目に、マジョリティとの関係から見る社会におけるマイノリティのあり方、そして2つ目に、マジョリティからマイノリティへの認識について。これらについて述べていく上で、まずは作中で主人公の笑子が睦月に語った「銀色のライオン」の伝説を引用しておく。

笑子曰く、「何十年かに一度、世界中のあちこちで、同時多発的に白いライオンが生まれることがあるという。極端に色素の弱いライオンらしいが、仲間になじめずいじめられるので、いつのまにか群れから姿を消してしまう」(P123) のだと言う。彼女は語る。「…彼

らは魔法のライオンなんですって。群れをはなれて、どこかに自分たちだけの共同体をつくって暮らしているの。彼らは草食なのよ。それで、もちろん証明されてはいないんだけど、早死になの。もともと生命力が弱い上にあんまり食べないから、みんなすぐ死んじゃうらしいわ。暑さとか寒さとか、そういうことで。…」(P123-124)そして、笑子はこう続ける。「睦月たちって銀のライオンみたいだって、時々思うのよ。」(P124)睦月はこの発言を受けて、「睦月たちっていうのはつまり、僕や紺や柿井や樫部さんのことなんだろうか」(P124)と認識している。

笑子自身が言い、そして睦月もそう理解している通り、この「銀色のライオン」の伝説は、「睦月たち」つまりセクシュアル・マイノリティの隠喩である。この一連の笑子の発言について、前述した2つの観点から順に述べていく。

まずは、作中のマジョリティとの関係から見る社会におけるマイノリティのあり方という観点から。「銀色のライオン」の伝説から引用するなら、「仲間になじめずいじめられる」「群れをはなれて、どこかに自分たちだけの共同体をつくって暮らしている」がこれにあたるだろう。端的に表すならこれは「マジョリティから迫害されたマイノリティ」の姿と言える。では作中において実際どのように描かれていたか、ということなのだが、まず断っておきたいのは、作中における「マイノリティの共同体」には睦月たち同性愛者に加え、笑子自身も組み込まれている、ということである。ゆえに、「セクシュアル・マイノリティ」という表現はここでは使わない。では本題に戻ろう。作中における、笑子、睦月を中心に構成されるマイノリティの共同体は、迫害された、というよりむしろ選択的にマジョリティから離れ、気ままに暮らしているように見えた。彼らに近づいてくるのは常にマジョリティに属する側の登場人物たちの方からだ。そして、笑子たちに関わろうとするマジョリティは常に、トラブルを持ち込み、彼らの平穏な日常を脅かすものとして描かれていた。笑子の元恋人・羽根木、笑子の唯一の親友・瑞穂、笑子の両親、睦月の両親…いずれと関わる時も口論や決別が起こり、笑子も睦月も穏やかでいられなかった。それを知ってか知らずか、笑子たちは自らマジョリティを避け、望んで小さな共同体として生きていたのかもしれない。以上、『きらきらひかる』では、マイノリティは「迫害されて逃げるように共同体を作る」のではなく、社会において進んで独自の共同体を作り、その中で平穏に暮らすことを選択している、というように描かれていた、とまとめることができる。

次にマジョリティからマイノリティへの認識、という点についても論じておく。引用部分では、「病弱、草食、早死に、銀色の美しいたてがみ」などが、「銀色のライオン」の特徴として挙げられていた。この笑子の隠喩、「銀色のライオン」の伝説自体は笑子の想像などではなく、テレビ番組を通じて彼女が手に入れた情報だ。しかし、この伝説を知った上で「睦月たちみたい」だと言ったのはほかでもない、笑子だった。つまり、この伝説を「睦月たちのようだ」と言った笑子の発言から、「銀色のライオン」の伝説で語られていることを、笑子という「セクシュアル・マジョリティ」から、「銀色のライオン」、すなわち睦月たち「セクシュアル・マイノリティ」へのイメージや認識として見るができる。そしてこの隠喩について私は、ある層の人々がしばしばマイノリティへと選択的に抱く、(概ね根拠のない)憧れ、羨望、崇拜、信仰心—すなわち、マジョリティによる「マイノリティ信仰」と関連性があるのではないかと考えている。『きらきらひかる』におけるマイノリティである同性愛者は、「稀少で美しく病弱」で、かつ「伝説」と言われる生き物に例えられて

いる。ここから、『きらきらひかる』におけるマイノリティが「美しくか弱い伝説の生き物」に例えられるような存在であると認識されている、つまりマイノリティ信仰の対象とされていると分析できる。その認識が、笑子だけのものなのか、それとも作者である江國のものかは定かではないが、少なくともこの特殊な認識が、「マジョリティ」から「マイノリティ」へのものであることは確かだ。マイノリティ信仰は、言うまでもなくマイノリティの存在を「普通」から遠ざけるものであり、マイノリティをより「特殊」な存在へと追いやってしまう。「銀色のライオン」が「伝説」であり「想像上の生き物」であるように、元日で、もしもこうしたマイノリティ信仰の意識がセクシュアル・マイノリティに向けられ、それが社会に蔓延したとしたら、セクシュアル・マイノリティもまた「想像上の生き物」へと追いやられてしまうかもしれないという危険性がある。

2. 3 総括—「ピエロ」「悲劇の主人公」、あるいは「ファンタジー」

前節までで、『ワーキングホリデー』『キッチン』『きらきらひかる』の3つの作品を通してフィクション作品におけるセクシュアル・マイノリティの描かれ方を分析してきた。この節では総括として、これら3つの作品に共通するセクシュアル・マイノリティのフィクション内での扱われ方について検討したい。ここでキーワードとなるのは「特殊性」であり、私が特に注目しているのは、彼ら自身に与えられた「特殊性」以上に、セクシュアル・マイノリティである登場人物たちが生きている世界のことである。

3作品の中で、セクシュアル・マイノリティである登場人物たちがそれぞれどのような世界に属していたか、もう一度振り返ってみる。『ワーキングホリデー』に登場するセクシュアル・マイノリティのキャラクター、「オカマ」のジャスミンは、ホストクラブのオーナーだった。『キッチン』に登場する「オカマ」、えり子は、ゲイバーで働いていた。『きらきらひかる』の同性愛者キャラクターであった睦月や紺は、作中笑子が語っていた「銀色のライオン」のように、笑子を含めた社会的マイノリティ同士身を寄せ合い、マジョリティから身を隠すように暮らしていた。ホストクラブ、ゲイバー、マイノリティだけの小さなコミュニティ—これらに共通しているのは、彼らが生きる世界は全て「特殊」で、日常から切り離された場所であること、と言えるのではないだろうか。つまり、フィクション作品におけるセクシュアル・マイノリティは、「日常」とは縁遠く非現実的で、マジョリティから見てどこか遠い世界で展開される物語の登場人物、として描かれているのだ。こうした描かれ方がマジョリティの意識を反映したものなのか、あるいは、こうした描かれ方によってマジョリティの意識が操作されているのか、という議論は、正に「鶏が先か卵が先か」という論になってしまうだろう。しかし、こうしたフィクションにおけるセクシュアル・マイノリティの描かれ方は、フィクションを受け取る側に対して「セクシュアル・マイノリティは日常の中になどいない、ドラマティックで特別な世界に生きている特殊な人間だ」という意識を植え付けてしまいかねない。こうして、フィクションを通じてセクシュアル・マイノリティに付与される特殊性が、現実においてもセクシュアル・マイノリティを人々の「日常」から遠ざけることとなり、そのことが当事者の生きづらさを助長している、と考えることが出来る。であれば、これを踏まえて当事者の生きづらさを解消していくために、どのようなことが出来るか、ということを考えなくてはならないだろう。

ところで私は、先日セクシュアル・マイノリティ当事者である B さんに直接お話を伺う機会があった。B さんはバイセクシュアル寄りのレズビアンであり、対談の中では彼女の感じる生きづらさや周囲の人々との関係など、様々な話を聞くことが出来た。そんな彼女との対談の中で最も印象的だったのが、メディアにおける「セクシュアル・マイノリティ」の扱い方について好感は持てるか、という質問に関連するお話だった。彼女のいわく、「オカマタレント」のピエロ的な扱いにはあまり好感が持てない、ということだった。それ踏まえ、以下そのときの彼女の言葉を引用する。

「オカマタレント（の頻出）もそうですけど、最近テレビなどで LGBT 特集が増えたなどと思って、でもなんだかすごく『深刻な社会問題』のように扱われていて…その（「オカマ」のピエロ的な扱いか、「LGBT」の深刻な扱いか）どちらかしか出来ないのかな、と思って。」

私はこの言葉に、鮮烈に心動かされたのだ。そして、「特殊」な存在としてでない、「当たり前」の存在としてセクシュアル・マイノリティを扱うことは出来ないだろうか、ということを考え始めた。メディアの中でセクシュアル・マイノリティを「当たり前」の存在として扱うことで、実際の当事者を「特殊性」へと排斥するその特殊なイメージや意識を変え、当事者の感じている生きづらさを解消していくことが出来るのではないだろうか。その可能性について、次章で詳しく述べていきたい。

3. セクシュアル・マイノリティのノーマライゼーションのために

前章においては、日本におけるセクシュアル・マイノリティのあり方をメディア、特に小説やマンガといったフィクション作品と関連付けて分析してきた。繰り返しになるが簡単にまとめると、フィクションにおけるセクシュアル・マイノリティは常に「特殊性」を付与されており、それが現実におけるセクシュアル・マイノリティへのイメージにも影響しているのではないかと、いう可能性が明確になった。そこで本章では、「セクシュアル・マイノリティのノーマライゼーションのために」と銘打ち、現状社会に根付いているセクシュアル・マイノリティの特殊性を孕んだイメージを解消することにより、当事者の感じている生きづらさの軽減の可能性について検討したい。

ここで本題に入る前に、まずは本論における「ノーマライゼーション」の定義について明らかにしておく。ノーマライゼーション (normalization) という言葉自体は本来、「標準化する、正常化する [ジーニアス英和辞典第 4 版]」という意味の英語 normalize に由来する名詞であり、「標準化、正常化 [同辞典]」などの意を持つ。それが転じて現在では「等生化」を意味する社会福祉用語として使われており、「障害者などが地域で普通の生活を営むことを当然とする福祉の基本的考え [広辞苑第六版]」と定義付けられている。本論においては、特に「標準化、等生化」の意を汲み、「ノーマライゼーション」を「当たりの存在とすること」と再定義したい。そしてこの定義を踏まえ、「セクシュアル・マイノリティのノーマライゼーション」とはどういったことかについても、ここで言及しておこう。前章、そして本章冒頭でも述べたが、現状セクシュアル・マイノリティは多くのマジョリティにとって「特殊」な存在であり、そうした特殊性が、セクシュアル・マイノリティ当事

者の生きづらさと関連している、と考えることが出来る。であれば、セクシュアル・マイノリティの生きづらさを軽減するために必要なのは、セクシュアル・マイノリティを「特殊な存在」というイメージから切り離すことである。セクシュアル・マイノリティの特殊性からの解放、すなわちこれが、「セクシュアル・マイノリティのノーマライゼーション」である。

ここからは、当事者の生きづらさを軽減のためのセクシュアル・マイノリティのノーマライゼーションを行う上で、どのようなアプローチが望ましいか、ということについて、具体的な方法を提案しながら検討していきたい。私が本論で提示したいのは、メディア、特にフィクションを利用したノーマライゼーションの方法についてである。というのも、すでに前章で見てきた通り、現状社会に流布するセクシュアル・マイノリティの特殊性を孕んだイメージは、フィクションにおけるセクシュアル・マイノリティの持つ特性と共通性がある。そのため、セクシュアル・マイノリティに対する意識形成にはフィクションの存在が深く関わっていると推察することが出来るのだ。それを踏まえ、まずはフィクションの中のセクシュアル・マイノリティを特殊性から切り離すことが、セクシュアル・マイノリティのノーマライゼーションへの糸口となるのではないかと、という仮説を立てるに至った。

では、セクシュアル・マイノリティを特殊性から切り離す、とはフィクションにおいて具体的にどのような形で行われるべきか。これについて結論から述べると、「セクシュアル・マイノリティ」そのものにスポットを当てない描き方をすることではないかと考えている。

たとえば、メインキャラクターとしてのセクシュアル・マイノリティについて。異性愛者のキャラクターが「彼（彼女）は異性愛者です」などという文言つきでは登場しないのと同じように、異性愛者のキャラクターには当然のように異性の恋人が存在するように、同性愛者のキャラクターにも、「彼（彼女）はゲイ（レズ）だ」という記述などはせず、当たり前のように同性の恋人が出てくる、そんな描き方ならどうか。物語の中で起こる大小さまざまな事件に、登場人物が「セクシュアル・マイノリティ」であることは関係ない、そんな物語はどうだろう。またたとえば、サブキャラクターとしてのセクシュアル・マイノリティについて。フィクションにおいて、主人公を取り巻くサブキャラクターは実に多種多様だ。友人、家族、恋人、男、女、子供、年寄り…そんな中に、まったく当たり前のようにセクシュアル・マイノリティ当事者が混ざっているのはどうだろう。名前は女性だが、台詞回しは明らかに男性のそれである。しかしそのことに対する説明は一切無い。読者も、初めは困惑するだろう。「この人は男性なのか、女性なのか？」と。しかしそこでわざわざ「彼女はトランスジェンダー当事者で、トランスジェンダーとはどういったもので…」という解説を入れるのは野暮というものだろう。「セクシュアル・マイノリティ」であることが、物語に直接的に影響しない描き方、すなわち、「セクシュアル・マイノリティを当たり前のもの」とする描き方をすることで、セクシュアル・マイノリティをその特殊なイメージから解放することが出来るのではないだろうか。

このように、メディアを通じて特殊性から切り離されたセクシュアル・マイノリティ、つまり「当たり前の存在」としてのセクシュアル・マイノリティの姿を提示し流布させることで、現実のセクシュアル・マイノリティ当事者がこれまでフィクションの中で描かれ

てきたような特殊な存在でも、特殊な文脈の中だけで生きている存在でもない、という意識改革を行うこと、すなわちノーマライゼーションが可能であると考えられる。ただし、この方法を実現する上では、解消すべき問題点がいくつか浮上する。中でも取り立てて注意しておかねばならないのは、フィクションはあくまで「創作」であり、書き手側も読み手側も、フィクションに対して生々しいリアリティを求めているのではない、という点である。いかにして「フィクション」の持つ世界観を壊さずにセクシュアル・マイノリティの偏見のもとになりうる特殊性を取り除いていくか、ということについては、今後の課題としたい。

おわりに

本論文では、セクシュアル・マイノリティの生きづらさの解消のために何が出来るか、という問題意識のもと、まずセクシュアル・マイノリティの定義をマジョリティとの対比によって明らかにし、彼らの感じる生きづらさに根源的に関わっているものは社会の意識である、とした上で、セクシュアル・マイノリティの存在を広く知らしめた要因としてメディア、特にフィクションを取り上げ、実際にフィクションの中でセクシュアル・マイノリティがどのように描かれており、それが社会のどのような意識を形成してきたかということ进行分析してきた。結果として、フィクションにおけるセクシュアル・マイノリティは非常に「特殊」な存在であり、マジョリティにとっての「非日常」として描かれていること、そして、フィクションによって流布されるセクシュアル・マイノリティの「特殊」なイメージが彼らの生きづらさを助長している可能性について明確した。その上で、セクシュアル・マイノリティの生きづらさ解消のためにはセクシュアル・マイノリティを「特殊性」から解放すること、すなわちノーマライゼーションが必要であるとし、その方法について検討を試みた。本稿では、「セクシュアル・マイノリティ」そのものにスポットの当たらない描き方、すなわち登場人物がセクシュアル・マイノリティであるということが、物語に影響しない描き方をするのはどうか、という案を結論として提示した。

しかし同時に、そうしたリアリティを持たせた描き方がフィクションという世界を侵犯することにはならないか、という問題点も浮上した。フィクションの世界観を壊さず、セクシュアル・マイノリティをノーマライズする、この折衷案については、今後も探っていく必要があるだろう。

さて、最後に、「はじめに」では述べられなかった本論文に関する動機について述べたいと思う。

本稿冒頭で、セクシュアル・マイノリティに興味を持ったことからこの論文の執筆に至ったことを述べたが、そもそもセクシュアル・マイノリティに興味を持ったことには、自分がその当事者であることに気づいたから、という経緯がある。自分がセクシュアル・マイノリティ当事者だと気づいたのは、はっきりとは覚えていないが、高校生の時だったと思う。正確にはその当時はセクシュアル・マイノリティという言葉は知らず、ただ、「異性だけでなく、同性のことも好きになるのは当たり前のことではない、自分は周りとは違う」ということに気付いたのだった。自分の性に対して嫌悪感こそ抱かなかったものの、周囲

と違うことを不安に思っていた。大学に入ってやっと、多様な性を知り、自分の性の名前を知ることが出来、安心したのを覚えている。

当事者であるのに、自分のことがよくわからないまま悩んで、自分を追い詰めてしまった当事者の例は、これまで文献やエッセイで何度も読んだ。セクシュアル・マイノリティに関する知識を必要としているのはなにもマジョリティの側だけではない。むしろ、当事者にこそ必要なのだと思う。自分を認めるには、まず自分を知らなければならない。セクシュアル・マイノリティ当事者が、「自分を、自分の『個性』を殺す必要はない、自分は自分らしく生きていい」と思え、自分を認められるだけの材料に、いち早く、容易にアクセスすることが出来たなら、当事者が一人生きづらさを抱えてしまうこともないだろう。セクシュアル・マイノリティのノーマライゼーションが必要だと感じたことも、セクシュアル・マイノリティが「ノーマル」な存在になれば、それに触れる機会も増え、「自分はおかしな存在などではない」と思えるだろう、と考えたからだ。

これからもおそらく増え続けていくであろうセクシュアル・マイノリティのためにも、セクシュアル・マイノリティが「当たり前」の存在である社会になっていけば、と心から思う。

参考・引用参考文献

石元清英・谷千慧子・田中ヨシ和・葉賀弘・宮本由起代・山下明子・山村嘉己, 1996, 『ワークブック ジェンダーとセクシュアリティ―〈性〉と〈生〉を考える―』嵯峨野書院
セクシュアルマイノリティ教職員ネットワーク編著, 2012, 『セクシュアルマイノリティ 第3版―同性愛、性同一性障害、インターセックスの当事者が語る人間の多様な性』明石書店

中村美亜, 2008, 『クィア・セクソロジー 性の思いこみを解きほぐす』株式会社インパクト出版会

橋本秀雄, 2000, 『性のグラデーション 半陰陽児を語る』青弓社

竜超, 2010, 『虹色の貧困』彩流社

宮淑子, 2010, 『セクシュアリティ・スタディーズ』新水社

江國香織, 1994, 『きらきらひかる』新潮文庫

坂木司, 2010, 『ワーキングホリデー』文春文庫

よしもとばなな, 2004, 『キッチン』角川文庫

電通ダイバーシティ・ラボ

<http://www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html>

